

いま注目の「しんぶん赤旗」

制作現場から

「メディアもボロボロで、安倍政権に対する批判の機能が衰えています。強い存在、権力を持っている人に対し、萎縮している。だから国民には、安倍政権の何が問題なのか、見えにくくなっています」(金子勝・慶応大学教授、本紙日曜版10月23日号)

「毎日の新聞やテレビのニュースが、少しも面白くない。(中略)水面下ではとんでもない動きが進んでいるはずなのに、大マスコミは肝心なことを何ひとつ伝えてくれない」(ジャーナリストの斎藤貴男氏、日刊ゲンダイ11月2日付)

そんなメディア状況のなかで、安倍政権の暴走と正面から対決。戦手法、憲法、暮らしと経済、環太平洋連携協定(TP

P)、原発、沖縄の米軍基地問題など国政の焦点課題にズバリ切り込んで、異彩を放つのが「しんぶん赤旗」です。

本紙「たび」欄でイラスト・マップを描くワタナベ・コウさんは、1年前に初めてこの新聞に出会いました。

「広告出稿の大手企業がコワくてハッキリものを言えないのが新聞というものだと思い込んでいましたが、へええ真のジャーナリズムは、こんなところにあったのか、と驚きました」

大手メディアが伝えられない真実を伝え、勇気と希望を運ぶ「しんぶん赤旗」。新しい政治の実現へ、編集と取材の現場で格闘する記者の姿、思いを紹介しま



11・3保育大集会で保育の現状や要求についての訴えを取材する国民運動部の玉田文子記者＝3日、東京・日比谷野外音楽堂

新しい政治実現へ 本気で報道。



記者会を取材する国会取材団
11月7日、国会内

市民と野党共闘の最前線

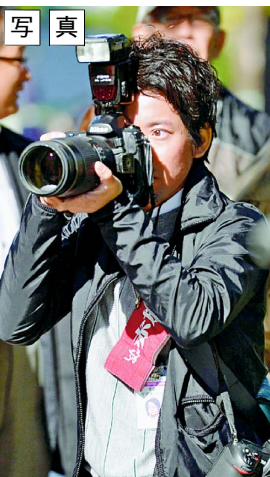
国会取材団
が集まっています。

戦後初めて全国規模で野党と市民の共闘が実現した参院選後、初の本格論議となった臨時国会。平和と立憲主義、国民生活の守り手として、躍進した日本共産党と野党統一候補らの活躍に期待と注目が集まっています。

国会取材団は、まさに野党と市民の共闘の最前線を取材。政治を動かす原動力が国民のたたかひにあることを伝えるために、国会周辺でのデモや集会にもできるだけ足を運び、院外の世論や運動が国会での論戦や野党の動向にも結び付いていることがわかる



テレビ・ラジオ番組表は8・9面



←一字一字にペンを走らせてチェックする校閲部の原千拓記者
✓自分が組んだ紙面についてデスクからアドバイスを受ける整理部の和田育美記者(左)
↓国会前の抗議行動を取材する写真部の小酒井自由記者



反戦デモの参加者を取材する洞口昇幸記者
11月2日、ニューヨーク(島田峰隆撮影)

米国の現実を伝える

ワシントン支局
洞口 昇幸
2005年入局

地方の大学を卒業後、初めは首都圏総局、次に政治部、そして外信部と異動し、現在は米国に赴任して3年がたちました。国民に寄り添い、国民共同の新聞である「しんぶん赤旗」の記者として取材する姿勢は、外国にいても変わらないと思います。

自分の書いた記事について、読者から寄せられる「いつか現実のアメリカの姿を見ることができて楽しみにしています」といった感想に、働きを大事にしています。

外語大卒でもなく留学経験もなく英語は苦手でしたが、国内の記者活動を通して海外特派員を志すようになりました。英語でわからないことは、まだまだたくさんありますが、あきらめない心と継続を大事にしています。

世界的な通信社が報じていないことを伝えることも「赤旗」の海外特派員の重要な役割です。米国内の最低賃金の引き上げを求める運動やその成果など、日本にとって「警告」や「励み」になる報道を心がけています。

会いたい人に取材を申し込み、直接話を聞けるのが記者の仕事のおもしろさ。ひとつの出会いから受ける刺激が、日々の活動の励みになります。

今、2人の娘の子育て中です。子どもが生まれて働き方は変わり、取材の日に娘が熱を出して慌てたことも。それでも記者を続けていられるのは、赤旗編集局では他の記者がライバルではなく、支え合える仲間だからこそ。懸命に生きる人に寄り添い、共にたたかうことができる場所です。

東海・北陸信越総局
伊藤 幸
2010年入局

9月に東海・北陸信越総局に異動になり、すぐに政務活動費の不正が大問題の富山県のトリプル選挙を取材することになりました。

12人もの議員が辞職したことにともなう富山市議補選では、日本共産党は現有2議席を倍増させ



富山市議補選の開票当日も取材する東海・北陸信越総局の伊藤幸記者＝7日、富山市

た一大腐敗事件。取材を通じ、「自民党をやめてきた」など不正を働いてきた自民党への怒りの声をたくさん聞きました。同時に、不正追及の先頭を全国に伝えたいと記事を書いてきました。

地方の現場では、安倍政権の暴走政治の矛盾が噴き出しています。だからこそ地方から市民と野党の共闘が発展しています。地域の声を今の政権につくつけ、地域に芽吹く政治革新の息吹を発信していきたいです。

人との出会いが励み



日曜版くらしチームの同僚と打ち合わせをする秋野幸子記者(中央)

日曜版編集部
秋野 幸子
1997年入局

記者になって4年目の冬、介護保険の負担増に苦しむ男性(77)に話をうかがいました。妻は10年以上寝たきりで、話し相手のいない孤独な暮らし。話は尽きず、取材は5時間以上におよびました。

別れ際「丁寧に話を聞いてくれて、ありがとう。良い記事を書いて、私のような人たちの思いを、多くの読者に届けてください」と励まされました。仕事でくじけそうになると、今でも私はこの言葉を思い出し、自ら奮立たせています。

会いたい人に取材を申し込み、直接話を聞けるのが記者の仕事のおもしろさ。ひとつの出会いから受ける刺激が、日々の活動の励みになります。

今、2人の娘の子育て中です。子どもが生まれて働き方は変わり、取材の日に娘が熱を出して慌てたことも。それでも記者を続けていられるのは、赤旗編集局では他の記者がライバルではなく、支え合える仲間だからこそ。懸命に生きる人に寄り添い、共にたたかうことができる場所です。

「しんぶん赤旗」と編集局

「しんぶん赤旗」は、日本共産党の機関紙です。1928年2月1日に創刊され、いま日刊紙と日曜版(週刊)の二つの新聞を発行しています。

赤旗編集局には約300人が在籍するほか、各都道府県にも約50人の記者が配置され、日々の取材・新聞制作にあたって

います。

編集委員会のもとに編集センターと21の部があり、全国の取材網としては北海道から沖縄までカバーする五つの総局と四つの支局、海外には北京、ハノイ、カイロ、パリ、ワシントンに支局があり、特派員が常駐しています。

【21の部】論説委員会、政治部、社会部、経済部、国民運動部、外信部、スポ

ーツ部、党活動部、地方部、学術・文化部、くらし家庭部、テレビ・ラジオ部、囲碁・将棋・行楽部、写真部、読者室、広告部、校閲部、整理部、日曜版編集部、工程管理・開発部、総務部

記者募集中
要項は1面